伝説創生

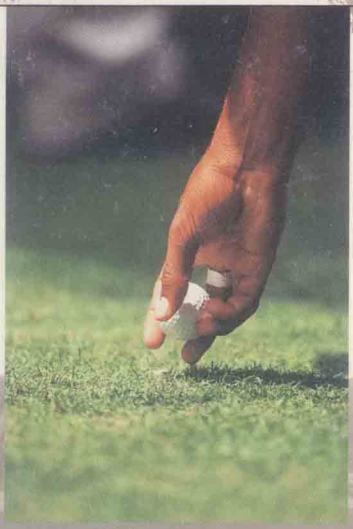
THE MAKING OF GOLF LEGEND

タイガー・ウッズ

神童の旅立ち

三田村昌鳳

Shoho Mitamura



TIGER WOODS
ERNIE ELS
JUSTIN LEONARD
DAVIS LOVE III

タイガー・ウッズ
神童の旅立ち

三田村昌鳳
Shoho Mitamura

工业学院图书馆
藏书章

中央公論社

伝説創生（でんせつそうせい）　タイガー・ウッズ神童（しんどう）の旅立（たびだ）ち

一九九七年一〇月一五日初版印刷
一九九七年一〇月二五日初版発行

著　者　三田村昌鳳（みたむらしょうほう）
発行者　笠　松　巌
発行所　中央公論社
〒104 東京都中央区京橋二―八―七
電話　販売部〇三―三五六三―一四三一
編集部〇三―三五六三―三六六四
振替　〇〇一二〇―四―三四

印刷製本　大日本印刷株式会社
本文用紙　王子製紙株式会社

© 1997 Shoho Mitamura／CHUOKORON-SHA, INC.
ISBN4-12-002730-9 C0075 Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。
落丁本・乱丁本はお手数ですが小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

目次

プロローグ　5
第一章　マスターズ
ロング・インタビュー　18
ランナーズ・アップ　40
ピンポンとTVゲーム　55
第二章　全米オープン
優勝インタビュー　74
タイガー・ウッズ基金　89
プレッシャー　106
悪童と神童　119
アスリート・ゴルファー　130

第三章　全英オープン　136
ブッチ・ハーモン　141
SUZUKIの挑戦　150
ゴルフの故郷　165
スコアボード　173
リンクスの洗礼　191
ライダーカップへのチケット
第四章　全米プロゴルフ選手権　200
パーマーの時代　217
ゴルフ界の帝王　234
ハローワールド　247
フォロー・ユア・ドリーム　259
エピローグ　268
あとがき

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

伝説創生

タイガー・ウッズ 神童の旅立ち

プロローグ

１９９７年春――。

タイガー・ウッズは、オーガスタにくる直前、米ツアーの先輩で、同じフロリダ州のアイルワースに住むマーク・オメーラとラウンドして、自宅近くのゴルフコースで59というスコアを出した。

オメーラは、ウッズにさまざまなアドバイスをしてくれている。１９９６年、プロ転向した直後もそうだった。４戦目のＢＣオープンで3位タイになったあとウッズは、疲れ果てて次の試合を直前キャンセルしてしまった。マスコミや関係者から非難を浴びて憔悴しきっていた。そんなウッズを、釣りに誘い出したのもオメーラだった。

「マスコミは、僕に手厳しいんだ」とウッズが言うと、オメーラは「マスコミは、いまの君自身を映し出す鏡なんだよ」と諭した。それ以来、よく相談したり、ゴルフをしたり、釣りを楽しむ間柄になっていた。

59をマークしたマスターズの前週、ウッズはともかく気持ちいいほど、ショットも、そしてパッティングも決まっていた。インは27で、アウトは32だったという。

オーガスタにやってきたのは、そんなスコアを記録して楽しんだあとだった。

１９７４年4月――。

僕が、初めてオーガスタを訪れたのはこの年だった。

鉄分をいっぱい含んだ赤土の土地が、一瞬、目の前に広がった。すると蛇行する大きな川の姿に変わって、交互に見え隠れしながら、飛行機は飛んでいた。その川も決して清流ではなく赤土色の混じった濁流だった。その景色に、今度は緑の木々が生い茂る森が加わった。深い緑色した樹木は、上から見るとてっぺんが尖っていて輝き、奥の暗い地面とのコントラストが強く、きっと高くそびえ立っていることがうかがい知れた。

『アガスタァ』と、ガの部分に強いアクセントをつけた発音でスチュワーデスがアナウンスをした。きっとそれは《オーガスタ》にもうすぐ着くのだろうと推測させた。

「フー」と僕の横でため息をついたのは、ジャンボ尾崎だった。つられて僕も深く深呼吸して、シートベルトを締め直した。

思えば、とんでもなく遠いところにきてしまったな、という気持ちが先だった。僕は、ジャンボ尾崎を追って、東京から米国西海岸のサンフランシスコに渡り、深夜便で一気にアメリカを横断してノースカロライナ州グリーンズボロまで辿り着いて、そこのトーナメントでジャンボ尾崎をつかまえた。試合前日だった。その試合でジャンボは、予選落ちをして予定より2日早くオーガスタに行くことになり、僕も、同行することにした。途中、サウスカロライナ州のシャーロットで飛行機を乗り換えた。そこの空港レストランのことを、僕は思い起こした。

日本人の僕たちが席に座って軽食をとろうとメニューを見て、注文しようと何度も白人のウエイトレスを呼んでもなかなかやってこなかった。20分ほどしてようやくやってきたウエイトレスは、黒人だった。さして混んでもいないのに、と僕は腹立たしかった。

このあたりは、かつてはコットンフィールドで、黒人たちが綿積みをして働いていた。南北戦争を長く引きずっていた深南部の田舎街である。きっと初めて見る日本人だったのかも知れない。あとで知ったのだが、オーガスタはサウスカロライナ州とジョージア州が蛇行するサバンナ川に沿って区切られている州境に位置していたのである。

オーガスタ空港は、まるでプライベート空港のように小さく、タラップを降りて100メートルも歩かないうちに、ふかふかした芝生があり、そこにパラソルのついた白いテーブルと椅子があった。それは大きな屋敷の中庭にそのまま飛行機を横付けした気分にさせてくれる。

「よォ、着いたな」

「どうも」

こぢんまりしたターミナルでジャンボを迎えに来ていたのは青木功だった。青木はこのときがマスターズ初出場で、2日ほど前に東京から直接ここにきていた。ふたりとも、それぞれ一軒家を借りていた。コース周辺にホテルがほとんどないこの町は、期間中だけ選手や関係者に民家をそのままレンタルしてくれる仕組みになっている。ベッドもタオルも冷蔵庫もキッチンも、すべて自由に使える。引き出しを開けようと思えば、いくらでも私生活が見えてしまう無防備さ、その他人に家を明け渡すという心理は、僕には理解できなかった。

マスターズという大会が、それだけ信頼関係を繋ぐイベントなのか、あるいはアメリカ人の気質なのだろうか。その一週間、住人は一週間のレンタル料金をめあてに家族旅行にでかけたり親戚の家に居候するのだ。尾崎は、月曜日から借りる契約になっていた。つまり、土曜日は

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

まだ住人がいて明け渡す準備ができていない。「とりあえずうちに来たら」と青木が言い出して、僕たちは青木の借りている家に向かった。予期せぬ来訪者、尾崎の寝室は、子供部屋で、小さなベッドに体を丸めるようにして眠らざるを得なかった。僕はソファで寝込んだ。

翌朝、初めて見るオーガスタのコースは美しくて、とても眩しく輝いていた。

1995年……。

飛行機の中で『ニューヨークタイムス』のスポーツ欄を眺めていた。大会がはじまる前の日曜版だった。マスターズに関する記事が2本掲載されていた。大きく扱われたのは、アーニー・エルスだった。『彼の運動能力、運動神経はゴルフ以外のプロスポーツをやらせても一流レベルに到達している。これまでのプロゴルファーは、ともすると素晴らしいアスリートの能力はさほど必要でなかった。むしろ優れたテクニックやメンタル面と経験則が重要視されていた。けれども21世紀のプロゴルファーは、エルスのようなアスレチックな能力がまず必要とされる』という内容だった。

「プロ野球で1位にドラフト指名されるような運動能力を持った選手が、プロゴルフ界にどんどん出て来ないと、世界では通用しない。そういう時代がきてようやく世界のゴルフ界のスタートラインにつける時代になる」

と、尾崎が言っていたのを思い出した。

その記事の下に小さくマスターズ関連の記事が載っていた。1枚15ドルの練習日のギャラリ

ー券が1枚３５０ドルまで跳ね上がっているという記事だった。年々増え続ける練習日のギャラリー。昨年は、１日６万人が入っていた。その練習日のチケットを一年前から予約前売りにして、しかも2万５０００人に絞ったのだ。６万人は、あまりに多すぎてコントロールしきれない。ゴルフは、静と動のメリハリでゲームが争われるもので、観客もその空気に溶け込んでいなければならない。６万人は、その空気の範囲を超えるというのが主催者の意見である。けれども、それは同時にチケットが、プラチナペーパーになることを意味する。

もっともいまは大人気のマスターズも、１９３４年開催当初からしばらくの間、ギャラリーは少なかった。従って、ツテを頼ってまとめ買いしてもらった時期もあった。ダフ屋は、そういうところからチケットを集めているらしい。試合のチケットは、４日間通しのシーズンチケットしか発売していない。これもリストによって毎年同じ人に打診することからはじまる。もし購入しないとなれば、ウエイティングリストの順番に沿って申し込み用紙を送る。いまでは、ウエイティングリストも3万人ほどいるという。

４日間通しのチケットしか発売していないのは、18ホールの区切りでなく、起承転結の72ホールを見て、はじめてゴルフトーナメントが成立するという哲学だからだろうか。もちろん、これも限定だから、ダフ屋の末端価格が３０００ドルまで上がってしまったのである。

この21年間でオーガスタの街は、ほとんど変わっていない。空港からボビー・ジョンズ・ハイウエイが国道20号線に接続してオーガスタナショナル・ゴルフコースまで、ダウンタウンやスラム街を通らなくても済むようになったことと、コース周辺にモーテルやインがどっと増え

て、賑やかになったことぐらいだろうか。コースは、毎年少しずつ改造されているが、それは極端にコースのデザイン思想を変えてしまうほどではない。

すべてが、昔どおりに伝統と権威をマスターズという個性を際立たせている。ボランティアは、３０００人を越えるという。彼ら彼女らの中には、両親から受け継いで毎年、同じ場所の同じ仕事についているボランティアも多い。

プレスビルのガードマンもこの20年近く変わっていない。太っちょのおじさんだ。この人は全米オープンでもプレスルーム担当をしている。一度、朝食を一緒に食べて、身の上話を聞いた仲である。「やあ、どうも。元気？　ゴルフの調子はどう？」と挨拶するほど顔見知りにもかかわらず胸元のバッジをしっかり確認する。見えないと、プレスビルに入れてくれない。杓子定規でもなく、ナアナアでもないほどよさが、このガードマンやボランティアの態度によく表れている。

ふと、僕はマスターズという大会が、米国深南部のオーガスタでなく、例えばロサンゼルスやニューヨークなどの都会に近い場所で開催されていたら、と想像してしまう。

きっと典型的なアメリカの白人社会のソサイアティを感じさせるような大会に育っていなかったのだろうと思う。ゴルフトーナメントが、地域社会と密着して、その土地の風土、環境、習慣に染まって育っていく自然発生的なものがあるとしたら、マスターズはオーガスタでなければいけない。

『スポーツイラストレーティッド』誌のゴルフ担当記者が、びったりとタイガー・ウッズにはりついていた。彼は、一昨年から『ニューヨークタイムス』から『スポイラ』に転職した優秀な記者である。もうひとり入社2年目の若い記者は、ジャンボ尾崎を追っかけていた。

タイガー・ウッズは、19歳のアマチュアゴルファーである。ジュニア時代から数々のタイトルを獲って、スタンフォード大学のフレッシュマンになったばかりだった。この年は、前年の全米アマチュア選手権のチャンピオンとして招待された。

「このコースは、ドライバー勝負でなくセカンドショットゲームのコース」というほど、彼のドライバーの飛距離はずば抜けている。ジャンボと一緒に回った3日目は、すべてウッズのボールが先に飛んでいた。

オーガスタの18番ホール。そのフェアウエイ左サイドに、大きなバンカーがふたつある。ティグランドからグリーンまで、20メートル打ち上げていくホールだ。最初の設計ではひとつだけだった。選手たちが、軽く右に曲がるフェードボールを打つとフェアウエイ。それが曲がらずにまっすぐいったり、逆のフックボールになると、バンカーに入ってしまう距離にあった。その最初のバンカー手前までが241ヤード。十分、効力のあるトラップ（罠）だった。

1960年代になって、ジャック・ニクラスが登場した。彼は、そのバンカーを軽く越してしまう飛距離の持ち主だった。トラップとして意味のないバンカーになってしまったのだ。オーガスタは、その奥にバンカーをもうひとつ造らざるを得なくなったのである。ふたつめのバ

ンカー手前まで271ヤード。それを越すには、20メートルの打ち上げホールで、300ヤードのキャリー（落下地点）がなければならない。ということは、平坦なホールでは、320～330ヤードにボールが落下するパワーが要求されるだろう。

ひとりの人間の出現が、コースを変えてしまう。20世紀の革命児がニクラスだった。そしていま、ふたつめのバンカーを軽々と越してしまう人間が現れた。タイガー・ウッズだ。彼は、無限の可能性を秘めているゴルファーだった。21世紀のゴルフを予感させる選手だった。

観客もマスコミもこのウッズに対する注目度は高かった。80年代以降、ヨーロッパ選手に押され気味でアメリカのファンたちは、欲求不満だった。そこにウッズが出現したわけだ。

観客に混じってウッズのプレーをみていたら後ろからギャラリーの声が聴こえてきた。

「あれだよ、彼がタイガー・ウッズさ。あの若者は、黒人、中国系、アジア系、それにネイティヴ・アメリカンの血を引いているんだぞ」

とひとりのギャラリーが喋っていると、隣の男がこう言った。

「それがアメリカ（人）じゃないか。まさに彼は、アメリカそのものじゃないか」

マスターズが黒人プロゴルファーを初めて受け入れたのは、1974年のリー・エルダーであった。20年以上が過ぎて、アメリカも、マスターズも少しずつ変わってきている。

最初は、オーガスタのコースの美しさが眩しくて仕方がなかった。そのうち眩しさに慣れてきて、その光と影が織り成すマスターズをみていると、1930年代からのアメリカそのもの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c